

『十年間隔言語地図』を用いた「言語地図年代学」の発見

江 端 義 夫

I. はじめに

I. 1. 目的

本研究は、十年間隔言語地図を用いて地理言語学の新しい方法を開発し「言語地図年代学」とも言える研究方法の確立を目指した実証的研究のこころみである。事例として推量表現「あしたは晴れるだろう」の方言地図を使用する。

結論として、日本語史上、中世の「開合の別」は江戸期に混同して衰滅したとされるけれども、現代方言史の世界では、日本列島上に「開合の交叉性分布」が見られ、さらに、「開音」の分布は中部日本で拡大しつつあることを指摘する。日本語史上の注目すべき新事実について考察する。

I. 2. 資料

本研究では、以下の8枚の方言地図を使用する。1966年から2006年までの四十年間に、約十年間隔で七回の方言調査が実施

され、その都度、言語地図が作成された。

- | | | | | |
|-----|-----------|-------|-----------------------|--------------------|
| 第1図 | 愛知県言語地図 | 老年層 | 1966-1968、1970-1971年、 | 臨地調査、79地点 |
| 第2図 | 愛知県言語地図 | 少年層 | 1966-1968、1970-1971年、 | 臨地調査、79地点 |
| 第3図 | 中部日本語地図 | 老年層 | 1976-1977、1977-1978年、 | 臨地調査、167地点 |
| 第4図 | 中部日本語地図 | 少年層 | 1989-1991年、 | 臨地調査、141地点 |
| 第5図 | 中部日本語地図Ⅱ、 | 成人男女、 | 1994年、 | 通信依頼
実地調査、272地点 |
| 第6図 | 日本列島言語地図 | 成人男女、 | 2005年、 | 通信調査、
507地点 |
| 第7図 | 日本列島言語地図 | 少年層、 | 2005-2006年、 | 通信
依頼実地調査、252地点 |
| 第8図 | 総合図 | | | |

I. 3. 質問文

「あしたは晴れるだろう」というのを、土地ことばでどう言いますか。」

この質問文は、空模様を眺めて、「あしたは晴れるだろう」と推量する表現である。この文は、自然現象を表す助動詞の「晴れる」に「だろう」が接続する。「意志」や「勧誘」を表す助動詞の「う」（む）とは文脈上の意味が異なる。したがって、推量の意味を質問していることが明確なので、「だろう」についての回答には、誤答が殆ど見られなかった。

II. 言語地図間の比較を通して、言語変化を考察する。

II. 1. 第1図と第2図との比較：1966-1968、1970-1971年、老年層と少年層の比較

0-1971年、老年層と少年層の比較

第1図と第2図では、老年層と少年層との間に、大体50年の年齢差がある。それなのに、調査日が同じでも、世代差によって方言は確実に推移していく様が見てとれる。

第1図には、三本の境界線が見える。境界線①は、ヤローとダラーの境界線である。

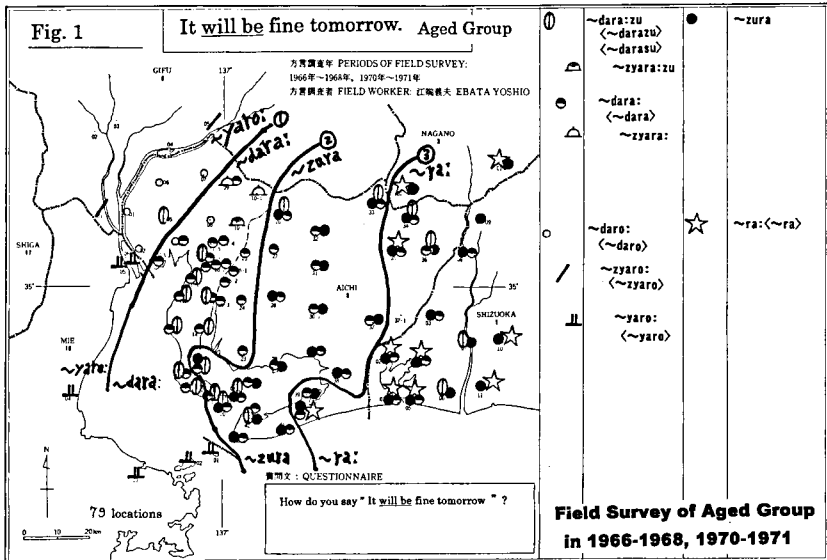
（ダラー）の用法は次のとおりである。

長呼形の「ダラー」と短呼形の「ダラ」との2つがある。これは、「〜であらう」がつづまって、「ダラー」となったものである。

「ダラー」はおもに、体言・用言に承接する。このほか、助動詞・副詞・助詞にも承接して、広義の推量表現をつくる。

愛知県言語地図

LINGUISTIC ATLAS OF AICHI PREFECTURE



「ダラー」の表現機能は、単純な想像・推測・推量よりも、確実な推察・推定・確認・同意要求の方が多い。実例は、以下のとおりである。

まず、人の立場を推察して、「ダラー」と言う。

○ワルキアモ ナイダラーケドモ ナー。悪気でもないだろうけれどもねえ。老女↓中女、愛知県渥美郡赤羽根町西瀬古 1965

65

○ジューダイノ ウチニ デタダラー。十代のうちに、(村を)出ただろう。老女、愛知県南設楽郡鳳来町本郷 1976

他方、推察した内容を相手にもちかけ、確認する表現も多い。

○ノーキョー ホンイダラー ノー。農協本意だろうねえ。老男↓筆者、愛知県渥美郡赤羽根町 1965

○カニチュー モンダロ。ソダダ。蟹と言うものだろう。そうでしょ？中男↓中男、愛知県知多市南粕谷 1965

○ホーダラー。そうでしょう？老女、愛知県東加茂郡足助町 1976

「ダラー」には、比較的自由な承接法が認められる。表現機能に関しては、推察や確認を中心にしたものが認められる。

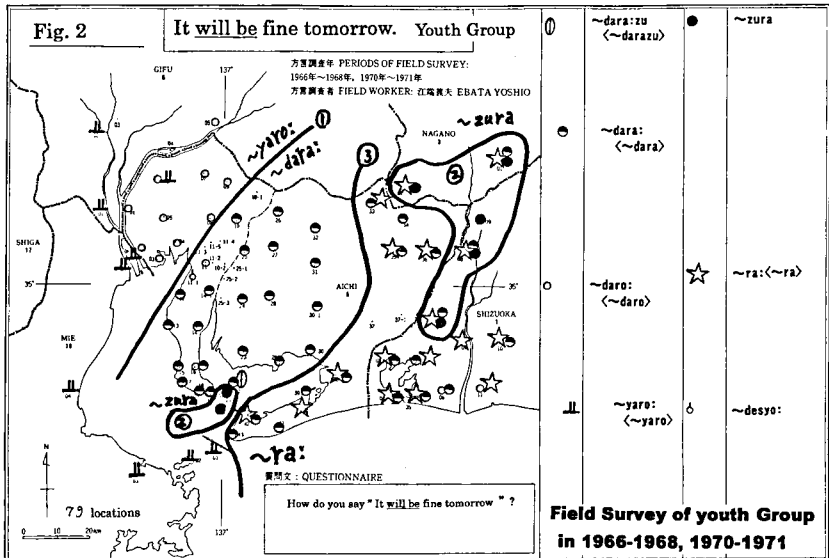
〈ダラーズ〉の用法は次のとおりである。

「ダラーズ」と同様の事象には、長音が脱落した「ダラズ」、さらに短縮した「ダズ」、古形を保つ「ダラス」などがある。「ダラーズ」の出自は、「〜であらうず」とされよう。承接のしかたは、「ダラー」と同じである。

○マー ナカララズ。もう無いであろう。中男↓筆者、愛知県知

愛知県言語地図

LINGUISTIC ATLAS OF AICHI PREFECTURE



多市南粕谷 1965

○イマワ ワテツテー モノワ ナイダラーズ。今は、「わてつ」というものは無いだろうよ。老男↓筆者、愛知県知多市南粕谷 1965

自分の推量に、確信を持った表現に、「ダラーズ」がよく使われる。

○サゾ オモワセルダラーズ。コンナ トコエ コニヤ ヨカッ

タニ。さぞかしお思いになるだろうよ。こんな所へ来なければ

よかつたにと。老男↓筆者、愛知県知多市南粕谷 1964

○マー ハラガ ヘツタダラーズ。(赤ん坊)は、もうお腹がす

いただろうよ。初老女↓中女、愛知県知多市南粕谷 1966

それゆえ、「ダラー」の文アクセントは、上昇調が多かつたけれ

ども、「ダラーズ」のは、下降調が多い。

また、「ダラーズ」には、上例以外に、相手に反撥したり、念を

押したりする機能がある。

○ナーニガ ヤワコカラーズ。何が(こはんが)柔らかいことが

ありましようか。初老女↓初老女、愛知県知多市南粕谷 19

66

つぎに、「ダラス」は、逆接の接続助詞「ケド」が承接して、「ダラスケド……」となり、推量を婉曲的に表現することがある。

○マイリニ キテクレルダラスケド ナン。参拜に来てくれる

だろうけどね。老女↓筆者、愛知県知多市南粕谷 1963

○モッコ、オマエニヤー ワカルダラスケドモ……。ッもっこ

(巻)ヶ、お前にはわかるだろうが……。老男↓筆者、愛知県知多

市南粕谷 1965

「ダズ」は、つぎのようにおこなわれている。

○ソレワ ドーデモ イー ヨーナ モノダズ。それは、どうでもいようなものだろう。老男↓筆者、長野県小県郡和田村字

上和田 1974

さて、この境界線①は、第1図と第2図とで、全く微動だにしない。同じである。

境界線②のゝズラは、老年層で、愛知県の中部と東部とで盛んに使用されている。しかし、第2図の少年層では、その分布が衰退して、島嶼部と県境とに引き裂かれて位置する結果となっている。

境界線③のゝラは、分布が東側から西側に領域を広げている。だから、境界線③は、少年層で分布が西方に拡大しつつあることを示している。しかし、共通語化ではない。

II. 2. 第1図と第3図との比較：老年層における1966年と

1976年との比較

第3図は、中部日本全域の老年層を臨地調査した結果である。第1図と第3図との間には、10年の開きがある。高度成長期の10年は言語変化にも大きい変革があると予想していた。しかし、その予測は外れた。

愛知県地方について、第1図と第3図とを比較してみても、老年層における方言分布に大きな差違は見られなかった。何故だろうか。多分、老年層においては、仮に世の中が大きく変革しても、10年の経過くらいで、彼らの言語生活が大きく影響を受けることがないのであろう。老年層を10年間隔で追いかけても彼らの言語生活は安定

しているものであり、質の変化が大きく転換することは期待できないことが分かった。

II. 3. 第3図と第4図との比較：老年層と少年層とを13年後に

比較

第3図の老年層と第4図の少年層とを比較してみよう。

①注目されるのは、ゝラーの言い方が第4図で増えている点である。ゝラーの言い方の中核地域は、静岡県、山梨県である。それが、長野県地方や愛知県地方へと、分布領域を拡大している。第3図で静岡、山梨、長野に色濃く分布していたゝズラは、第4図で殆ど消えた。ゝズラがゝラに変化した。

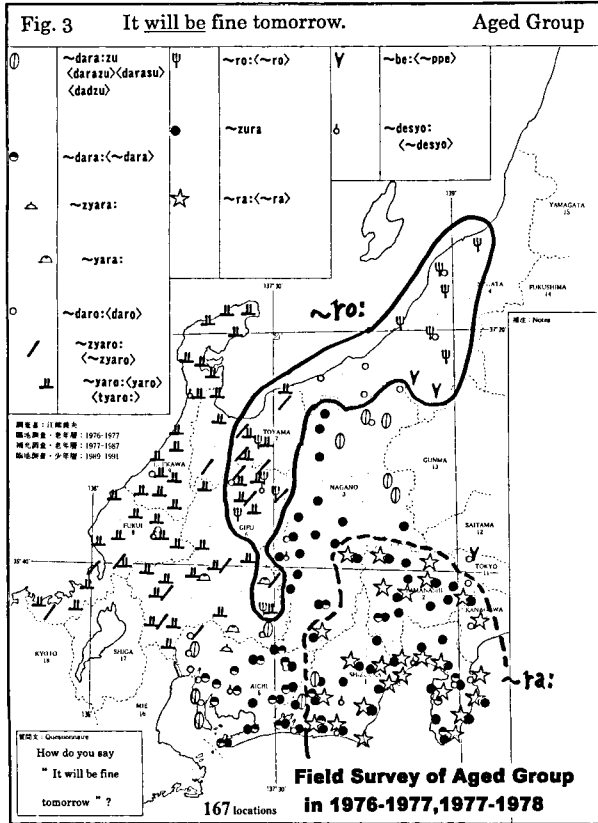
〈ズラ〉の用法は次のとおりである。

「ズラ」と「ズラー」のうち、短呼形「ズラ」のほうが、よく使われる。「ズラ」は、おもに、体言、用言に承接する。そのほか、副詞や助動詞や助詞などにも承接する。

「ズラ」の表現機能は、多様である。一つに、現前の空模様を把握して、自信ありげに表現するばあいがある。

○アシタワ アメズライ。あしたは、おそれなく雨だろうね。(老女)長野県上伊那郡箕輪町 1976

中部日本語地図 (臨地調査)
A LINGUISTIC ATLAS OF THE CENTRAL JAPAN (FIELD SURVEY)



○アシター アメズラ ナーシ。明日は雨でしようねえ。(老女)長野県木曾郡山口村馬籠 1974

二つに、事の断定さをさしひかえ、婉曲ぎみに表現するばあいがある。

○モーチョーズラ ニー。盲腸炎だろうよ。(中男)長野県木曾郡植川村字贄川 1974

○ソリヤー アル。アルズラー。それは

(きつと) ある。あるだろう。老男、長野

県木曾郡山口村馬籠 1974

三つに、「ズラ」には、相手に問いかけ、念を押し、肯定の返事を期待するばあいがある。

○オジサンモズラ。おじさんも(バスで来るん)でしょ? 老女↓中男、山梨県南都留郡

河口湖町大石 1976

○イケニ オル ヤツズラ。(ザリガニの絵を見て)池に居るやつでしょ? 老男↓筆者、愛

知県豊田市植田町 1965

四つに、相手(聞き手)が返答してくれるのを期待し、話者が自問するばあいがある。

○モチチョーナンテ シラナンズラニ。盲腸炎なんて、今まで知らなかったらうにね。

老男、長野県木曾郡植川村字贅川 1974

○ケサオカヨリ シタズラ カー。けさおか

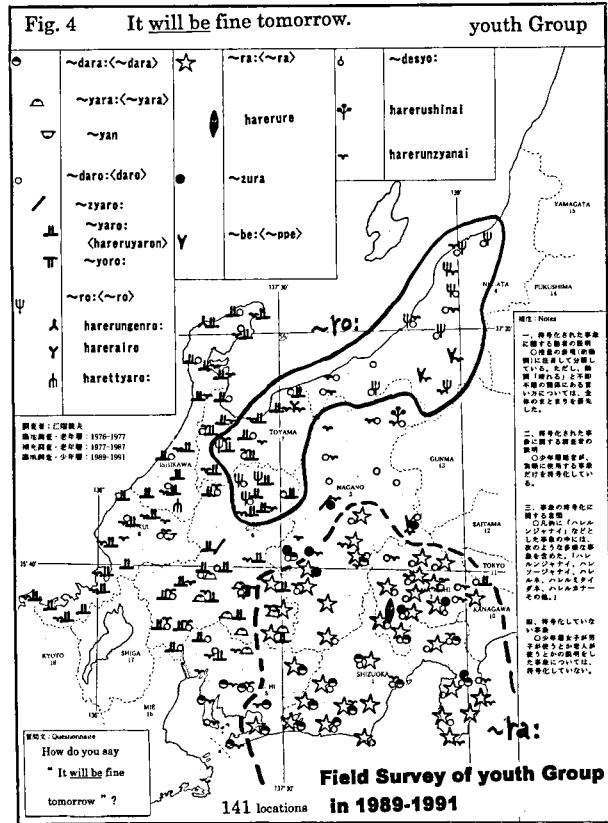
(人名) よりも年下だろうか? 老女↓老女、山梨県中巨摩郡芦

安村小曾利 1976

へら)の用法は次のとおりである。
「ラ(ラー)」は、ふつう、動詞に承接する。このほか、形容詞、助動詞にも承接する。「ラ」の承接法の幅は、「ズラ」のよりも狭い。

「ラ」は古語の助動詞「らむ」が、「らむ」<「らん」<「らう」<

中部日本語地図 (臨地調査)
A LINGUISTIC ATLAS OF THE CENTRAL JAPAN (FIELD SURVEY)



「らー」の変化を経て、生じたものであろう。

「ラ」には、おおよそ四つの表現機能がある。その一つは、つつましい婉曲の推量表現を形成するばあいである。これは、以下のよう

に「ズラ」のと比較すると、用法の差が明瞭である。
○マタ フルジャ ネーラ カネー。また、雨が降るのではない

曲的)

○アメガ フリソーズラ。雨が降りそうだろう。中女↓老女、静岡県田方郡修善寺町紙谷 1976 (直裁的)

二つめに、「ラ」は、眼前の事物、人間、動物の存否(在る・無い・居る・居ない)を確かめるばあいがある。

○クスリガ ソコニ アルラ。ノメ シー。葉がそこにあるでしょ。飲めよ。老女、山梨県東山梨郡牧丘町窪平 1976

○トマトー ナイラ。トマトはないだろう? 中男↓老男、愛知県渥美郡赤羽根町 1965

○ウン。ウチー クル ツモリデ オルラー。うん。家へ帰って来るつもりでいるんだろう。老女↓息子、長野県木曾郡山口村馬籠 1974

○ムカシノ トモダチガ インラー。昔からの友達が居るのでしよう。老女↓中女、静岡県賀茂郡南伊豆町大瀬 1976

三つめに、「ラ」には、聞き手に対して、肯定のあいづちを期待するばあいがある。

○シッテルラ。ヨロズヤノ フミチャ。知っているでしょ? 雑貨屋のフミちゃん。老男↓中男、長野県木曾郡植川村字数川 1974

○シットラ センラー。知ってはいないでしょう。中男↓筆者、静岡県湖西市湖市町白須賀 1965

○ワツカヤヒンラ。ことばがわからないでしょ? 老女↓筆者、愛知県渥美郡渥美町中山字北郷 1965

四つめに、「ラ」には、独自のな自問の推量表現をするばあいがある。

ある。これには、概して形容詞が関与している。

○アイシラ ハヤイラー。ああいう衆は、(免許を取るのが) 早いにちがいない。老男↓老男、山梨県北巨摩郡高根町 1973

○イツケンダカラ イーラ。(古い家は) 一軒だからいいだろう。老女、山梨県東山梨郡勝沼町 1976

「ズラ」と「ラ」との表現機能を比較すると、ひとまず、よく似ていることが言える。両者の相違点は、「ズラ」が、未来的、抽象的ことがらについての推量が特色であるのに対し、「ラ」は、概して現実的、具象的存在についての確認推量が特色である、と言うことができようか。

②第3図で、古い語形の「ダラーズ」が僅かに見られた。もともと、これは、「〜であらむとす」が「〜であらむず」になり、「〜ダラーズ」に転じたものとされる。第3図で、長野県北部と愛知県周辺に残存したけれども、第4図では、消えてしまった。古めかしい「むず」は少年層に馴染まないのであろう。「むず」は無くなったけれども、「ダラー」が残った。少年層は、「ダラー」に違和感を抱いていない。老年層が「ズラ」を好み、少年層が「ダラー」を好む。「ズラ」は消えて「ダラー」に変わっていくのである。この「ダラー」も次第に「ダ」を除いて「ラ」へと交替していく傾向が見える。

③第3図でも第4図でも、共に、共通語の「〜だろう」の分布は少ない。彼らが普通に使用するのは、土地の方言的な言い方である。共通語の「〜だろう」は、書き言葉として理解していても、話し言

業として使用されない。

④第3図も第4図も、共に、北陸地方の新潟県から富山県にかけて「ろ」が分布している。「らむ」に由来する古語だけれども、分布量は減っていない。

〈ロー〉の用法は次のとおりである。

「ロー」は、岐阜県下と新潟県下とで、よく聞かれる。「ロー」の出自は、「らむ」√「らん」√「らう」√「ろ」とたどられる。現在のことからについての推量を表現することが多い。

○カゼガ フクデー ツレニクイロー。風が吹くから、(魚が)釣れにくいでしょう? 中女↓初老男、岐阜県吉城郡宮川村杉原 1976

○コカー スシガ アルロー。スシガ。この(店に)は、寿司が(売って)あるだろう。寿司が。中男↓中男、岐阜県吉城郡 宮川村杉原 1976

○ノーキバスノ ハシガ アルロー。濃城バス(車座)の(傍に)橋があるだろう? 中男↓筆者、岐阜県吉城郡神岡町東雲 1976

○ンマ ノム ネー。ンマ タベルロー。飲み物(牛乳)を飲むね。牛乳を飲むでしょ? 老女↓幼女、新潟県新潟市横尾 1976

以上、「ロー」は、初対面の人、年上の人、同僚、子どもへのもの言いに認められる。やさしみ、親愛の情が醸成されてもいよう。

「ロー」が、指定の助動詞を介さずに、単独で、用言の言い切り形の形に承接して、推量表現を形成するのは、上述の諸事象に比して、

特異である。

⑤突然変異と見て良いものに、山梨県の「ハレルレ」がある。一地点だけの特異な語形である。発想法の優れた少年が創造した言い方であろう。恐らく「晴れるラ」があり、「晴れるロ」があることからの類推によって、「晴れるレ」を作ったのであろう。広母音の ラ と ロ と レ は、推量の助動詞として利用された。では残りの「晴れるリ」と「晴れるル」は、創作される可能性があるだろうか。その可能性は低くないと言えよう。

II. 4. 第4図と第5図との比較: 少年層で盛んな ラ が老年層でも広く受容された。

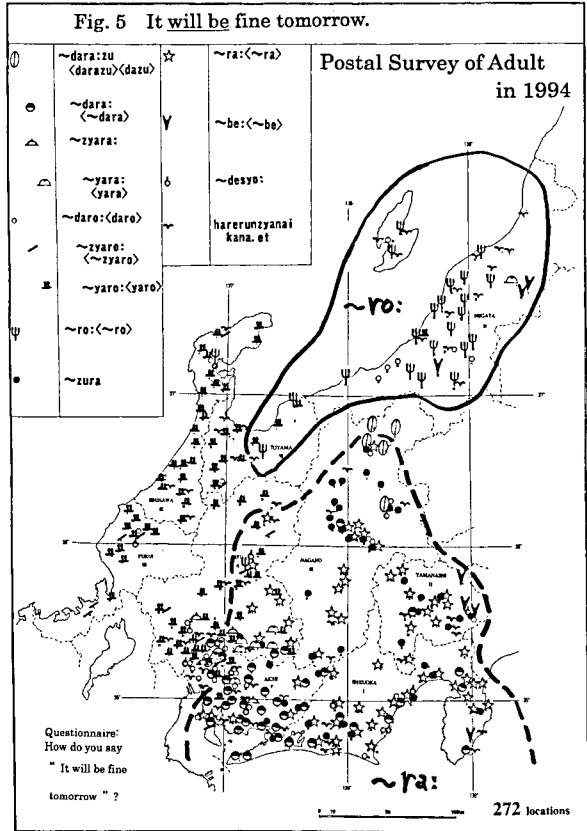
1994年に中部日本で、成人男女を対象とした通信依頼実地調査を実施した(第5図)。

①第5図によれば、 ラ は、確実に成人男女にも分布が拡大している。長野県の北部にまで ラ の分布が到達している。また静岡県に中心地を持つ ラ は、岐阜県の北部にまで、分布を広げた。方言形の ラ が北へ西へとその分布を拡大し続けている。

② ズラ の分布が激減した。しかし長野、山梨、静岡、愛知の4県に薄く根強く、その分布を残しているのが見える。 ズラ は老年層においても早晚、消える宿命が窺える。

③ ダラ は、まだ、10年前の分布状態(第4図)を維持している。 ダラ は、 ズラ の分布範囲内に収まりつつ、4県内で、しっかりと使用され続けている。 ダラ には、まだ古めかしさは持たれていない。土地人は ダラ よりも ダラ の方に優しさを抱いている。

Fig. 5 It will be fine tomorrow.



④第5図(1994年)の老年層によれば、古い語形の「〜ダラズ」が長野県の北部に残っている。1976年の第3図では、愛知県の知多半島や周辺にまばらに分布していた「〜ダラズ」が、1994年には完全に消えてしまった。1966年の第1図では、「〜ダラズ」が、まだ盛んに古老の間で使用されていた。しかし、28年後の1994年には、第5図の東海道沿岸で、それらが、全く

と関東の地域では、〜ペーを好む意識が強い。東京や神奈川・埼玉などでは「〜ペー」の分布がやや少なくなっている。分布が減っているけれども、分布全体の輪郭は、年層を通じて保たれている。

③「晴れるロー」は、新潟県から富山県、岐阜県にかけて分布する。また、「〜ロー」は、北陸だけでなく、高知県にも分布がある。二つに離れた分布は、かつて、北陸から四国にかけて連続していた

衰滅した。その変遷の速さに驚くばかりである。

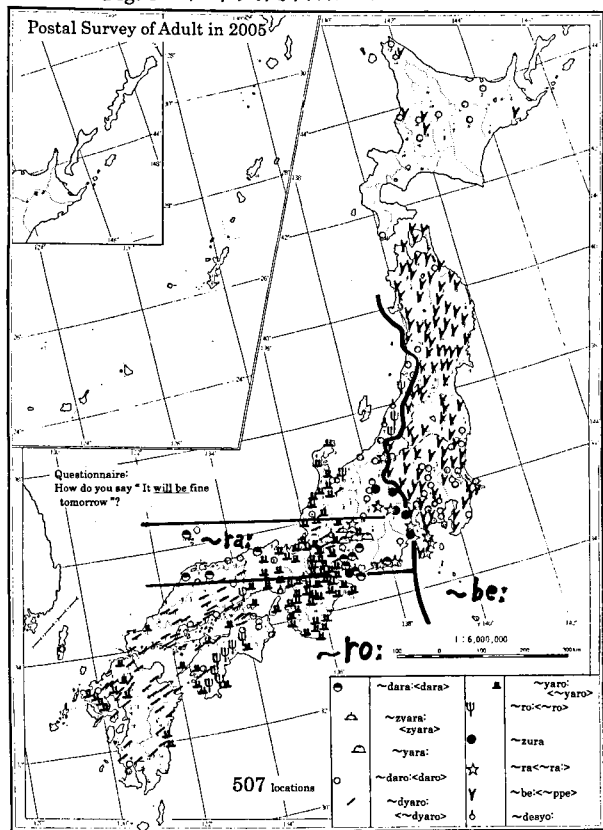
II. 5. 第6図と第7図との比較: 老年層と少年層を2005-2006年と比較する。

全国レベルで、「〜だろウ」の分布を総合的に考察する。第6図も第7図も通信依頼実地調査である。日本列島の全域を対象にして、推量の言い方の年層比較を行ってみたい。

①第6図では、北海道・東北地方から関東地方にわたって、強力な〜ペーの分布が見られる。〜ペーは、両唇破裂音だから、相手に訴えかける聞こえの効果が大きい。「あしたは晴れるペー」という簡潔で明晰な言い方が、東日本で濃密な分布を示す。北海道・東北・関東地方の「〜ペー」では、広く「未来」の意味(=推量・意志・勧誘)で使用されている。

②第7図の少年層においても、北海道・東北

Fig. 6 日本列島言語地図 老年層



ものと見られる。詳細は後に再度検証する。

④第7図に、日本列島を横断する見事な「だら」の分布が見える。

山陰の「だら」と東海地方の「だら」とが繋がって捉えられる。東海地方に盛んな「だら」と山陰地方の「だら」の分布は、同じ物であることを認識すべきであろう。

山陰地方の鳥取県で盛んに聞かれる「だら」の文例を少し、

掲げる。

○アシタワ テンキニ ナルダラー ナ。明日は天気になるだろうね。老女↓筆者、鳥取県仁多郡仁多町馬馳、1972

○シットルダラー。知っているだろう。老男↓筆者、鳥取県鳥取市湖山町、1977

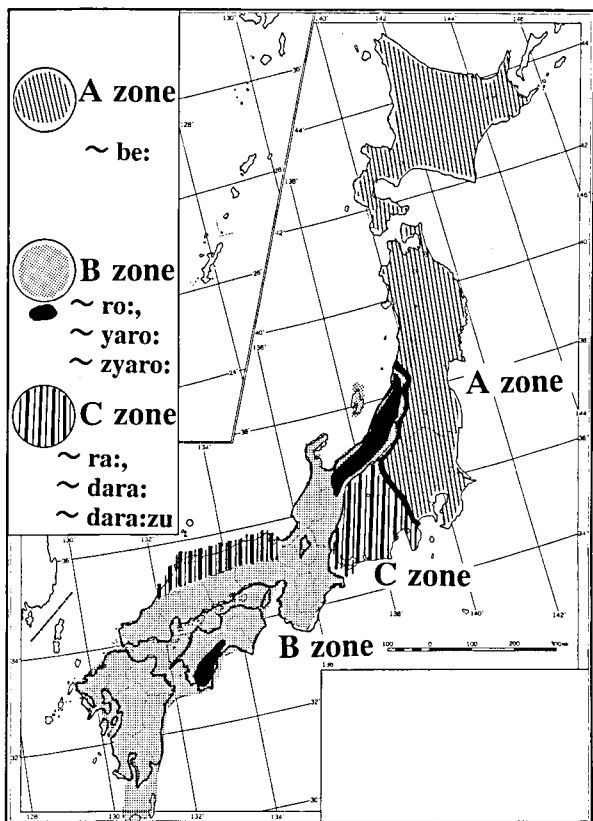
○アシター ハレルダラー。明日は晴れるだろう。老男↓筆者、

同前、1977

鳥取県で聞かれる「だら」の機能は、中部日本の「だら」と同じである。いままで、東と西に分かれて分布する「だら」を結びつけて、同じものだと考えた先行研究は見出せていない。しかし、山陰地方の「だら」と東海地方の「だら」とが同じものであると考えてみると、意外にも新しい発見がある。それを、以下で考察する。

⑤中世の中央語には、「開合の別」が見られた。[a]がアとなり、[ɔ]がオとなる。この開合の音韻の区別が推量表現に適用された事実として解釈されるのである。日本列島の中で、横断的に認められる山陰地方と東海地方の「晴れるだら」[ɔ]には、開音が残存するのだと解釈することができる。これに対して、西日本に広く分布する「晴れるヤロー」「晴れるジャロー」「晴れるロー」などの「晴れるダロー」

Fig. 8 The Total Study of the Expression



強力な分布勢力を維持してきた語形である。
たとえば、額田王の歌で、自然現象の「雲」が主語になっている
例がある。

○三輪山をしかも隠すか雲だにも情あらなむ隠さふべしや (71
4年頃巻1-18)

上の例における「べし」は、希望的な推量を表す。次の歌は「鶴」

が主語になっている。

○大和恋ひ寝のねらえぬに情なくこのすさま
みに鶴鳴くべしや (714年頃巻1-71)
「べし」は、平安時代の「蜻蛉日記」や「源
氏物語」にも頻繁に出てくる。関東・東北・北
海道の「べい」は直接に古代の「べし」と結び
つけられないけれども、無関係ではないことは
確かである。

○影もみえがたかべいことなど、まめやかに
かなしうなりて (蜻蛉日記) 974年頃
中世の「雑兵物語」になると、推量の助動
詞としての地位が明確になる。

○「今日は川越が有べいに」(雑兵物語) 1
683年頃

1604-1608年にロドリゲスが長崎で
出版した「日本大文典」には、すでに「関東ま
たは坂東の訛として「べい」を特別に扱ってい
る。

○直説法の未来には盛に助辞Bei(べい)を使ふ。例へば、Main
mosubei (参り申すべい)、Agubei (上ぐべい)、Yomubei (読む
べい)、Narubei (習ふべい)、など。

日本語の歴史上、中世から数えて400年間も続く。この「べい」
を愛して使い続ける東北地域の人々のアイデンティティーに感服す
る。と同時に、「べい」を使用し続ける気質にも驚かされる。

清音と濁音の趣向から見れば、田を選ぶ必然性は無いように思われる。なのに、強いて「べい」に収斂し固執する意志が却って注目させられる。しかも、老年層に限らず、少年層においても、「べい」を嫌わず、好んで使用する現実を、しっかりと見据える必要がある。将来にわたり、生き続ける語形なのであろう。

へべい」の用例を北海道から順に南へ辿れば、つぎの通りである。

○ヨンダイシエツ ネ。メージシエツ テンチヨシエツ ヘー
カラ アツタベ サ。スグ ハイシン ナツタドモ サ。四大
節ね。明治節、天長節、それからあつたでしよ。すぐ廃止に
なつたけれどもね。69歳老男↓筆者、北海道上磯郡木古内町、
1988

○（姉の家へ遊びに行った時の話）ネーサン ウチー イッテ
ウドン ゴツツオーン ナルベー、ソバ ゴツツオーン ナ
ルベー……。姉さんの家へ行って、うどんをご馳走になること
にしよう、蕎麦をご馳走になることにしよう……。70歳老女↓
筆者、小樽市銭函、1995

○コレア エーダベ カ。これで良いだろうか。中男↓老男、青
森県西津軽郡森田村床舞、1985

○ムカシモ オンナジダベ サ。老女↓筆者、同前、1985

○ノポリダベ。（切符を買おうとして確かめる。）上りでしよ。老
女↓中男、青森県上北郡野辺地町、1985

○アシタダラ アメア フラネーベ。明日だったら雨は降らな
いだらう。老男↓筆者、青森県東津軽郡平内町小豆沢、1985

○ナンモ オンベデラベ。あなたも覚えているでしよ。老男
↓筆者、青森県北津軽郡中里町中里、1985

○カントコデ ヤルベ ナ。片足跳びでやろうよ。老男↓筆者、
同前

○アシタ テンキニ ナツベ ガナ。明日、天気になるだろうね。
老男↓筆者、同前

○ヒトツ タバベ カー。一つ、食べようか。老女↓筆者、群
馬県高崎市菊地町、1975

○アシター ヨカンベ。明日は良い天気だろう。老女↓筆者、
群馬県碓氷郡松井田町、1974

○イチジデ クルダンベ。一時の列車で来るだろう。老女↓老
女、同前、1974

○ドコエ イッタンベ ナ。どこへ行ったのだろうね。老男↓
老女、同前、1974

○シンバイ ナカンベ。心配無かるう。老男↓筆者、同前、1
974

○ジツト シテタラ イタク ネーダベ。じつとしてたら痛く無
いでしよ。中女↓老女、同前、1974

○アメガ フルダンベ ナ。雨が降るだろうなあ。中女↓筆
者、同前、1974

○タカサキ イッタンベ。高崎へ行ったのでしよ。老男↓
筆者、同前、1974

東北地方は、「べい」ばかりが分布している。他の推量、意志、
勧誘の言い方を寄せ付けない。老年層に限らず、少年層まで、男女

を問わず、私的な場面では、「ペー」を使用する。知的な装いをしなくてはならない場合を除いて、「未来」の言い方に「ペー」を使う習慣は深い。しかも、A Zone は面積が広く、地域のアイデンティティーも得られやすい。奈良時代からの由緒正しい「ペシ」に由来する表現であるという意識があるのかと疑うほどに、使用者に揺れが無い。欣然とした使用態度も天晴れである。古態の「ペー」を使うことに対しての卑下感が全く無い。近畿地方の人々が、公然と近親者に「行かハル」を使用する意識と同じである。気負いも無く、自然に使われているのを見ると、「ペー」が今後も消えることなく、活気を以て生き延びるであろうことを感じさせる。

Ⅲ. 2. B 地帯と C 地帯が分かれる前の状態について

B 地帯と C 地帯とが分かれる前は、共に「らむ」であり、同じ地帯に属していた。「万葉集」の例がある。

○白波の浜松が枝の手向ぐさ幾代までにか年の経ぬらむ(巻1—34, 714年) 山上憶良作、

次は柿本麻呂の歌、

○石見のや高角山の木の間よりわが振る袖を妹見つらむか(巻2—132, 715年)

二つともに、現在推量の意味が強いけれども、終止形に接続する文法規則は、現在と同じである。

ところが、中世になって、いわゆる「開合の別」の規則が行きわたる。「続群書類従巻第五百六十一 遊戯部十一 申楽開書 pp.242—258」によれば、大森彦助が次のように書いている。

○らうといふ字はすほむるなり。らうといふこと葉はひらく也。(pp.258, 1599年)

したがって、慶長4年(1599)年には、すでに開合の別が厳然と守られていたことが知られる。また、標準語の発音に、開音と合音との区別を明確に識別することが求められていたのである。

ところが、僧契沖の「和字正濫通妨抄」(元禄十年、1697年)には、「あうとをうおうはおなしき、なるへし」とある。すでに、百年経って、開音と合音との区別は、京阪地方でも失われていたと見られる。

とすると、1590—1690年までの百年間が、注目されることになる。すなわち、B zone の [ɾɔ] と C zone の [ɾɛ] が明確に歴史的な仮名遣いの通りに発音が仕分けられていたのである。

Ⅲ. 3. B 地帯、B zone の「あしたは晴れるらー [ɾɔ:]」について

先にも述べたように、元禄期以降、契沖が嘆いているように開合の規則が乱れた。

そこで、結果として、B Zone の北の端に位置する新潟県と四国の西端に位置する高知県とに、現在も、「合音」が維持されていることになった。しかし、開音であるべきところにさえ、合音を使用するという混乱を来している。

その他、B Zone では、「うであるらむ」が「うであらむ」になり、「うじやらう」になり、さらに、現在の「うじやろう」になった。また、「盛ん」に使用されている「うやろー」へと変化し、それを包み込んで、最も古い語形の「うらう」を残しているのである。

開音に発音すべき次の音も、契沖が嘆くように、開音に発音しないで、合音に発音する。

「あう、かう、さう、たう、なう、はう、まう、やう、らう、わう」。(ただし、キリシタン語彙の合音と方言の合音との具体的な対応作業をまだ行っていない。勿論、疑似合音であり、正しくは音韻同化である。)

Ⅲ. 4. C 地帯、C Zone の「あしたは晴れるラー [a:ɪ]」に見られる、横断的な分布について

これは、「あしたは晴れるラー [a:ɪ]」と発音する地域である。契沖が1697年に指摘したように、開合の別の乱れにより、合音に成るべき語形にまで、開音になってしまった地域である。だから、[ɛ] の連母音は、ことごとく [ɛ] にまとめてしまいがちである。そこで、つぎのような例は、[ɛ] になる。「話さう、浅う、死なう、遊ばう、休まう、暗う、折らう」のようにである。ただし、漢語の字音に [ɛ] が見えても、それを [ɛ] に改めることはしない。「あうぎ・奥義、かうぎ・講義、あふぎ・扇、あふしう・押収」をアーギ、カーギ、アーギ、アーシュー」などは発音しないの言うまでもない。

Ⅳ. 現在も活発に分布を拡大している「開合の別」の分布について

Ⅳ. 1. 「うら」(開音)の人気の高さ

図1から図7までの10年間隔言語地図で見られたように、C Zone の分布は北陸地方を除いた中部日本地方域に色濃く分布し、更に山

陰地方域の日本海側に分布が続いている。この分布は、連続していただのであろう。それを指摘する人が今までいなかっただけである。

しかし、「うダラ」の分布が中部日本と山陰とで間断なく連続していたことは明らかである。「うダラ」は年層を問わず、活発に使用されている。ただし、元になる「うダラーズ」は消えてしまった。方言的な特色が歴然とした「うズラ」も極端に衰退して、その代わりに「うラ」が生き延びる。生き延びるところか、少年層において、

「うラ」は本源地域の静岡県から、愛知県に分布を伸ばし、さらに長野県の北の果てまで、分布を伸ばそうとしている。今後も「うラ」の分布は、一層、盛んになる動きが見てとれる。

「開音」に由来する「うラ」でありながら、古くさいという意識が、使用者には全く認識されていない。老年層の話者よりも、却って、少年層の話者が好んで、この「うラ」を使うのが注目される。実例を静岡県と長野県に限ってとりあげてみる。

【静岡県の場合】

○アルラー。有るでしょ。青年女子↓青年女子、静岡県磐田市住吉町、1966

○チガウラー。違うでしょ。青年女子↓青年女子、同前、1966

○アンタヨク シッテルラ。あなた、よく知っているでしょ。

青年女子↓青年男子、静岡県浜松市子安町、1966

○ソーズラ テウラ。「そうずら」と言うでしょ。中女↓中女、静岡県引佐郡三ヶ日町、1968。へうラの口語性の確かさが出ている。ズラとラとが共存している。)

○タカイ ヤマ アルラ。タカイヤマがあるでしょ。老女↓老女、静岡県磐田郡佐久間町中部、1966

○ハナセラ センラ。話せはしないでしょ。老女↓老女、同前、1966

○モ一カツテ ショ一ナイラ。儲かって仕様が無いでしょ。中男↓中男、静岡県磐田郡水窪町、中男↓中男、1966

○モツテツテ クレルラ。持っていつてくれるでしょ。中男↓老男、静岡県天竜市二俣町阿蔵、1966

○ヤツテルラー。やっているのでしょ。中女↓小兒女、静岡県天竜市二俣町、1966

【長野県】

○キョネンワ カツトラ。去年は勝ったのでしょ。少年男子↓少年男子、長野県木曾郡山口村馬籠、1974

○ウチー クル ツモリデ オルラー。家へ来るつもりでいるの
でしよう。老女↓息子、同前、1974

○ホータイ アルラー。包帯、有るでしょ。老女↓夫、同前、1974

○モ一 デナイラ。もう、出ないでしょ。長野県木曾郡植川村、
老女↓筆者、1974

○アルラー。あるでしょ。老男↓中女、同前、1974

○イッテルラー。行っているでしょ。中女↓老女、同前、1974

4 ○シッテルラー。ヨロズヤノ フミチャ。知っているでしょ。万
屋のふみちゃん。老男↓中男、同前、1974

○マゼネット ノコツチャウラ。混ぜないと残ってしまうでしょ。
老男↓筆者、同前、1974

○ダイワギンコーニ イルラ。大和銀行に勤めているでしょ。老
男↓筆者、同前、1974

○ウン。ソーラ。うん。そうでしょう。老男↓老男、長野県下伊
那郡根羽村、1967

○アンジャ ネーラ。中男↓中女、長野県下伊那郡南信濃村、1
966

○アー ソリヤー スマンケド イクニンバカ イルラ。ああ、
それは済まないけれど、何人くらい要るだろうか。老女↓筆者、
同前、1966

「うら」の分布が、10年毎に、静岡県から北方へ延び、かつまた、
愛知県へと延びていることを確認することができる。また、「方言
文法全国地図」の237図、238図、239図、240図を見ると、日本列島の最南端にある竹富島で *parra*、石垣島で *putra*、*aminia*、
*aminaa*などが分布している。「うらむ」が早くに「うらう」になり、
「うらむ」や「ura」になって留まっている。古くて新しい状態であ
ろう。ただし、南島語の「urum」が中部日本地域の新鮮さを同じ状
態で醸しているかどうかは、未だ、確認出来ない。

IV. 2. 「うろ」(疑似合音)の閉塞分布について

「うだろ」は「うだらう」の音韻変化によって生じた形態である。
推量の言い方に関して言えば、「uau」が「uo」に転じたとい
う事実はありえない。だから、合音という言い方は馴染まない。

従って、疑似合音という言い方をするので、強いて、「開音」との対立軸を明確にしておくだけのことである。この「ろ」は「[e̞o̞]」の音韻同化現象によるものである。歴史的には、「だらう」の後に続いた変化である。

その事実を分布で確認することが出来るのは、次の事実による。すなわち、「ダラ」「ラ」の分布が中部日本から山陰地方にかけて、横断的な分布を成していた時期がありえた。その後、近畿地方を中心にして、「ダロー」の分布が西日本を中心にして広く強く分布してきた。その勢いに負けて、C Zoneの帯状の「ダラーズ」「ダラー」「ラー」の分布は京都、滋賀、岐阜の分布域を失った。連続分布が切断されたのである。

その結果、B Zoneは、田唇母音の「オー」の形になり、「ダロ」「ダヤロ」「ヤロ」の推量形式を生み、西日本、つまりは中央語としての典例となったのである。

最も広い分布域を持つ「ダヤロー」「ジャロー」「ヤロー」「ロー」は、北は山形県から南は沖縄まで強く分布している。いまや共通語も「ダロー」である。その追い風も手伝って、西日本での地位は固いものが認められる。ただし、歴史的には、「dearu」>「dearo」>「djaro」>「zjaro」>「jaro」>「ro」のような変化過程を経たものと解釈される。一番新しい語形の「ro」が沖縄と高知県と新潟県とに繁く見出される。地形・地理の突端部分に必然的に先鋭な言語形式が生まれるというのが興味ぶかいことである。しかし、周囲分布の見方から言えば、「ロー」の分布は、「ラー」よりも中央に近い位置にある。言い換えれば「ラー」

の分布の方が外周に位置するということである。より南に位置するのが、「ラー」である。

一筋縄で括れないのは、北陸地方の「ロー」の分布である。「ロー」の分布は、堅牢な「べー」の分布域である山形県にまで到達している。

○会議 オワルロー。会議が終わるでしょう。中女↓筆者、山形県東田川郡三川町横内、1988

『方言文法全国地図』1から6を見ても、新潟県と高知県に、「ロー」の分布が集中しているが、その結果は、私の調査結果と一致する。ただし、私の調査は、「ロー」の分布がほとんど移動する状態まで読みとることが出来るのが利点である。ともかくも、「ロー」の実例を新潟県と高知県とについて、以下に取りあげる。

【新潟県】

○シッポワ ウスイロー。鮎の尾は薄いだらう。老女↓筆者、新潟県岩船郡山北町大毎、1980

○サキガ マクレテクルロー。鮎の体の先が捲れてくるだらう。老男↓老女、同前、1980

○アメ フルロ ネー。雨が降るだらうね。中女↓筆者、同前、1980

○オゲニ コーリハッタドキ ザイハッタテ ユーロー カネー。桶に水が張った時に「ざいはった」と言うだらうかね。中女↓筆者、同前、1980

○ショロー ポンプ アロー。消防署のポンプがあるだらう。老女↓筆者、同前、1980

○クガツニ ナラネバ カランネロー。ネー。稲は9月にならね

ば刈らないだろうね。中女↓筆者、同前、1980

○ヤツバリ グアイ ワルイロー。やはり具合が悪いだろう。老女↓中男、同前、1980

○ナンテテ ユーローン。何と言うだろうね。中女↓中女、新潟

県岩船郡山北町荒川、1980

○ネー イランダロン。ねえ、要らないだろう。初老女↓中女、同前、1980

○ソイガロー。そうだろうね、きっと。中女↓初老女、同前、1980

○アシタ ハレルロ カー。明日、晴れるだろうか。初老女↓筆者、同前、1980

○ナンボ ナツテルロー。幾つになつていよう。初老女↓老女、同前、1980

○ユービンキョクイ トドケテ オカネバテモ ソノ キョクハバカラテ ネーラ。屋号を郵便局へ届けておこななくてもその局は困りはしないだろう。初老女↓筆者、同前、1980

○テレビデ ミルロー。テレビで見よう。老女↓筆者、新潟

県岩船郡山北町大沢、1980

○マンマ クーロー。お昼にしようよ。老女↓幼女、新潟県新潟市榎尾字山、1976

○ンマ タベルロー。ご飯、食べるだろう。老女↓幼女、同前、1976

○カケルロー。書けるだろう、確かに。青年男↓青年男、新潟県

長岡市栖吉町仲町、1976

【高知県】

○ヤサイニ キリカエルロー。米作から野菜作りに切り替えるだろう。老男↓筆者、高知県中村市右山、1978

○アサモ タビ ハイチョーランロー。カ。朝も足袋を履いていないのだろうか。老男↓筆者、同前、1978

○ナイロー。カ。無いだろうか。老男↓筆者、同前、1978

○キカンロー。聞かないでしょう。老男↓筆者、同前、1978

○トレマセンロー。収穫できませんでしょう。老女↓筆者、高知県室戸市浮津、1979

○アスワ アメニ ナルロー。明日は雨になるだろう。老男↓筆者、高知県高知市一宮字前岡、1978

○アリマスロー。ありますでしょう。老男↓筆者、同前、1978

○ナイロー。無いだろう。老女↓老女、高知県安芸市本町、1979

「〜ロー」が動詞に直ぐに承接する形式が閉塞状態にあることを述べた。「来るロー」「行くロー」などの言い方が、新潟県と高知県とに偏在して、他への伝播に勢いを失っている。ただし、「行くだろう」「行くじやろう」「行くやろう」などの言い方は、健在であり、共通語の「行くだろう」は誰もが知悉している。使うかどうかは別にしても、知り得ているのは事実である。これらに共通した「〜」の音形は、西日本に広く見出され、かつ、沖縄やその南方にもある。「〜」よりも「〜」の方が新しい形として存在しているものと解

積しうる。

結 論

①本研究は、「十年間隔言語地図」を用いた「年層差」×「地域差」×「時代差」の総合的研究である。十年間隔で七枚の言語地図を年齢差毎に比較し考察する試みは、世界で最初の企画である。従来の方法は一枚の言語地図を眺めて、様々な仮説や手がかりを設定して推察と推定を繰り返す「静止画像」の解析作業であった。それに対して、本研究法は、「アニメーション画像」、つまり、動画の解析作業に相当するものである。歴史的な動向を押さえて、無理なく自然に方言動態史を説明していくことができる。

②「あしたは晴れるだろう」について、推量表現の歴史を説明する試みを行った。「ゝペー」が最古例として北海道・東北・関東地方に見られる。次いで、「ゝダラーズ」「ゝダラー」「ゝズラ」「ゝラ」が横断的に山陰地方と中部日本地方に分布し、かつまた、西南日本島嶼に見える。万葉集にも繋がる古態の事例である。「ゝラ」は若年層に好まれて分布が拡大している。

その次に、「ゝダロウ」「ゝチャロー」「ゝヤロー」「ゝロー」の事象系列が見られ、近畿地方・北陸地方・中国地方・九州地方に実例がたどられる。かつまた、西南地方の島嶼部にも例が見られる。

「ゝだろウ」の事象史は、三つの系列の事象の絡み合いでとらえることができる。

③三つの事象の系列を、分布する地域との対応でA地帯、B地帯、

C地帯と認定することが有益である。これらは、いずれも、古代に遡ることができる。A地帯の事象「ゝペー」は1300年間、化石化し固定して、変化しなかった。これに対して、B、C地帯は、「世の開合の別」規則の影響を受けた。B Zoneは、「合音」(疑似合音) (ゝo:) を選び、普及させた。C Zoneは、「開音」 (ゝai) を選んでそれを普及させた。B ZoneもC Zoneも分布が拮抗している。ただし、B Zoneの方が絶大な分布領域を持ち、しかも共通語の支援も受けているので、表向きは頑強そうに見える。ところが、C Zoneの「ゝra」は、共通語の「ゝrao」よりも根強く根深い。C Zone地方では、常識的な「標準語化」つまりは「ゝeo」系の言い方に必ずしも馴染めていないのが現実である。にわかには、共通語化を問題にすることが困難であろう。

鳥瞰的に分布を見れば、B zone とC Zone との関係は、「開合の交叉性分布」または、「十字路分布」と唱えることが出来よう。

④自然参加調査で得られた文例を解釈に活用することにより、文献資料だけでは不足がちなデータの補充を心がけることができた。一人の話者のデータだけでは不十分な資料を自然参加調査資料で補充して、バランスの取れた解釈を行うことに努めた。こうすれば、言語地図の相対的な解釈をより正確な解釈へと近づけることが出来るであろう。これは絶対年代史に一步近づいた研究と言いうるものではないだろうか。

⑤本研究は、ABA分布や方言圏論の適用による相対的年代史という解釈とは異なる。「十年間隔言語地図」を用いて実質的な分布の動態を根拠にした「言語地図年代学」によって、現代言語史を説明

していく建設的な作業である。

したがって本研究の方法は、「手がかり」をたよりにして、「静止画像」を解釈する従来の方法とは異なる。幾枚もの言語地図を重ねかけて変化過程を導き出していくものであり、科学的である。

今回は実施しなかつたけれども、言語変化の速度を計測したり、占有面積の変化を計測したりすることも可能である。

これらの方法を筆者は、「言語地図年代学」と仮称することにしたと考えている。

以上

【参考文献】

土井忠生訳注『日本大文典』（三省堂、1955年3月）

土井忠生・森田武「新訂 国語史要説」（修文館出版、1955年5月）

前田勇「開合」（『国語学辞典』東京堂出版、1955年8月）

橋本進吉「キリシタン教義の研究」（『橋本進吉博士著作集』第11、岩波書店、1961年3月）

小林芳規「平安鎌倉時代に於ける漢籍訓読の国語史的研究」（東京大学出版会、1967年3月）

湯沢幸吉郎「徳川時代言語の研究」（風間書房、1970年2月）

外山映次「近代の音韻」（『講座国語史』第2巻、大修館書店、1972年9月）

森田武「音韻の変遷（3）」（『岩波講座 日本語』5音韻、岩波書店、1977年8月）

築島裕「国語の歴史」（東大出版会、1977年11月）

柳田征司「室町時代語を通して見た 日本語音韻史」（武蔵野書院、1993年6月）

藤原与一「日本語方言辞書（下巻）——昭和・平成の生活語——」（東京堂出版、1996年12月）

沼本克明「日本漢字音の歴史的研究——体系と表記をめぐって——」（汲古書院、1997年12月）

国立国語研究所「方言文法全国地図」第5巻（財務省印刷局、2002年3月）

（広島大学）